

4 カルピニ「モンガル人の歴史」¹⁾

(ルブルク「旅行記」)



図1 カルピニ

(Ecole franciscaine de Paris)



図2 ルブルク

(Ecole franciscaine de Paris)

0 はじめに

かくて、ヨーハンネースの王国にヨーロッパ人が甘い期待と夢を育てていた十三世紀半頃、まさしく突如としてその境域に姿を現した東方の民は、そうした幻想を一切許さぬ恐るべき敵であり、聖墓の救援に馳せ参ずるところか容赦なくキリスト教徒に襲い掛かり、西方世界はイスラムに対して手を組むどころか、自らの防衛にうろたえねばならぬはめとなった。バトゥに率いられたモンゴルの西征によるそもそもの発端となる東西両世界の初めての直接的接触において、聞きしに勝るその圧倒的な軍事力の前にロシアや東欧ポーランド・ハンガリー・ドイツはなすすべを知らず、結果的にはオゴタイ・カアンの急死という偶然に幸いされてその侵略を免れたのであって、有効な対策を何ら立てられなかったばかりでなく、事態を正確に見極めることすら困難だった。

ヨーロッパがこの出来事とモンゴルをどのようにしか捉えることができなかつたか、当時の年代記が余すところなく伝えており、それはちょうどヨーハンネースの書簡の裏返しの続編となっていて興味深い：

人間の歓楽を長つづきさせず、この世の幸福が嘆きなくしては永続させぬよう、この年 [1240] 厭うべき悪魔の民、すなわちタルタル人の無数の兵は、山岳に囲まれたその故郷より解放され、[カフカズの] 堅い岩を粉碎して、タルタルスの国より悪魔のように襲来した。それゆえ、彼らはまさしくタルタリまたはタルタルと呼ばれる。……これら呪うべき記憶のあるタルタル人なるものは、モーゼの掟を棄てて、黄金の仔牛を追って去った十の支族より出た者であって、これまたマケドニアのアレクサンドロス大王がはじめてカスピア人の峻険な山中に瀝青で覆うた岩石をもって閉じこめようと試みた者どもである。……聖なる歴史には、世の終末のころ、タルタル人が出現して人々を多く殺戮するであろうと記してある……。²⁾

かつてはヨーハンネースがその力と威光でもって支配し、必要なときに呼び出しては敵に向かわせていたかの「極悪の種族」の新たな一族タルタル人が、ついに従順な「貢納者」たることを止めて、あろうことかキリスト教徒を喰いつくしに向かってきたか、それともかの「宝石の川」の向こうにいた「ユダヤの十支族」の者が、アレクサンデル王に閉じ込められたカスピ山中の岩石を破って、「地獄の使者タルタロス」の名のとおりアンチクリストとしての本性を顕にし、その川を渡って襲来したと考える他なく、歴史は福音書の予言どおりに進行しつつある、

いよいよもって終末の刻は近い、と。それもこれもすべて自分たちの罪ゆえであり、現世の富を追い求め、信徒同士の争いに明け暮れていたがためである、今や悔い改める時が来たのだ、と。

ヨーハンネースの王国は、ついにその本当の姿を現わすときが来たのである。と同時に、征服と支配の夢やぶれ、現実の東方を知ったヨーロッパもまた本当の姿を露にする。自らの支配下にないとなれば、＜異なるもの＞どもはもはや誇るべき豊かさではない：

彼らは非人道的で野獣さながら、人間といわんよりはむしろ怪物に近く、血に渴えて血をすすり、犬と人間の肉をむさぼり食い、牡牛の皮で身を包み、鉄板で武装し、身の丈は短く頑丈で胸幅厚く、不滅不敗である。彼らは、彼ら自身以外何びとも解することのできぬ言語を用いている。というのは現在まで何びとも彼らの住処に近づいたことはなく、また彼らもその本土から出たことがないからである。それゆえ、人々の普通の接触によって彼らの風習と様子を知るものはなかった。³⁾

中世ヨーロッパでは、キリスト教徒でなければ教敵たるイスラム教徒か、それでもなければ非人間的な存在、悪魔とか野獣とか食人種とか怪物とか、もう少しよくても、何処とも知れぬ彼方の果てからやって来た、文明と宗教すら持たぬ、フンやヴァンダルやゲルマンに代る、いずれにしてもまさしく不可解な言語を用いる蛮族であった。ここにも断片的に伝えられるその容貌・武器・風俗・習慣などは、それを立証し具体的な細部を構成する根拠となる。これが、モンゴルという未知の存在に出会ったときの一般的な理解の枠組みであり、これからたどるカルピニにおいてもその枠組みは基本的に同じものであることを見る。

とまれ幸いなことに、「キリスト教国の境域にきて、劫掠・殺戮し、あらゆる者をたとえようのない恐怖と戦慄におとしいれた」そのタルタル人も、東欧に侵入し、ウィーン郊外やイタリアはウーディネ地方やダルマチアのアドリア海岸に姿を現しただけで踵を返し、西欧にとって当面の危機は去る。ハンガリー王ベーラ四世の度重なる訴えや救援要請も、当時イタリア支配をめぐる争っていた教皇グレゴリウス九世と神聖ローマ皇帝フリードリヒ二世を動かすまでには至らず、その大同国結や対モンゴル十字軍もなされぬままに終わった。

この容赦ない現実と、しかし一方ではそのタルタル人がイスラム教徒をも倒したという確かな情報と、そして東方にキリスト教国があるというヨーハンネースの書簡や、彼らがそこからやって来たという噂と幻想を前にして、ヨーロッパは混乱し、それらをうまく繋ぎかねたし、政治的・軍事的行動を起こす力と余裕も

なかった。かくてとられたのが、その実情を偵察するため、すなわち一つにはタルタル人とは何者であり何を狙っているのかを探り、もう一つには本当に対イスラム同盟の可能なキリスト教国が存在するか否かを確認すべく、東方に使者を派遣することであった。⁴⁾

こうした時代的背景とヨーロッパ側の戸惑いと不安は、西洋と東洋を繋いだ最初の外交文書といわれる、カルピニの携えた教皇インノケンティウス四世（在位1243-54）のモンゴル王宛書簡の、次の、神の名において非難するしか他になく、どこか哀願するようなその調子によくうかがえる：

……我らは汝らが、かくも多くのキリスト教国とその他の国を侵略せりと聞き、汝らがこれを恐るべくも荒廃せしめたと聞き、汝らが激しき劫掠を働き、自然の親和力をことごとく打ち破り、老若男女を助けず、全ての人々を差別することなくなぎ倒したりと聞いて、ただただはなはだしく驚愕せしのみなりき。ゆえに我らは平和の神を範として、もろびと、主を懼れて一致せんことを望んで、汝らかもはやキリスト教徒を攻めず、かくも多くの罪によりて招きたる激しき神の怒りを和らげんがため、汝らがこれに見合う改悛に服することを我らは警告し、祈り、促すものなり。⁵⁾

このような訴えと警告を直接伝え、あわよくば異教徒あるいは神なき民に福音をもたせられて改宗させるといふ、ヨーハンネースが怠っていた任務に選ばれたのは、東方伝道のために設立されて間もないフランチェスコ・ドミニコ両会の修道士たちであり、その記録・報告が今に伝えられる最初がここに取り上げるカルピニとルブルクであった^{6) 7)}。彼らの旅の目的は、そうした表向きの宗教的・理念的なものであるよりも、実際は外交交渉・軍事偵察・地理探検・宗教調査等、様々な情報収集という世俗的・現実的なものであり、事実彼らの旅行記は、モンゴルとそこへ至る道中各地の道路・地理・気象・住居・宗教・産物・風俗それに歴史、つまりその社会と文化の紹介と案内となっている。そしてそれら旅行記は、上に引いた教皇の書簡や後に見るモンゴル皇帝のそれへの返書も含めて、それ自体が東西交渉史の貴重な文献であるのみならず、それら紹介・案内は、ヨーロッパ人による東方の直接的観察の最初の記録と報告として、また当時の中央アジアとモンゴルの地理と歴史、社会と文化の貴重な史料として、あるいは後に現れるポーロの書の先駆けとして、後世に知られかつ高く評価されるものとなっている。

この小論は、その歴史的背景やそこに記述されている個々の事項に関わる地理的・歴史的・民族学的な従来の研究に付け加えるべき何物も持たない。しかしながら、それら旅行記がもし東洋と西洋の直接的接触の最初の記録として貴重な価

値を持つものであるならば、同時に異文化接触の最初の記録としても同様に貴重なテキストであるはずであり、われわれの興味も、彼らが“何を”記述したかよりも、それを“どのように”叙述しているか、直接観察された個々の事実がどのように捉えられ、全体としてどのように組み立てられ判定されているかであり、観察の対象となっているアジアの社会と文化そのものよりも、それを通じて浮かび上がってくる彼らの、あるいは当時のヨーロッパ人の東方観と世界観であり、さらには<異なるもの>の系譜、他者異化の様式と構造である。すなわち、直接体験された現実の東方は、ダンテやヨーハンネースにみられたような理念と幻想の東方といかに違うのか、それとも同じなのかという点である。

もっとも、彼らの派遣の直接的契機となった前述の歴史的経緯や社会的状況、東欧侵略数年後というその時期、軍事偵察というその目的、「神の番犬」と呼ばれるようなキリスト教世界の先兵としての修道士の身分と思想、殺伐たる道中と困難な旅、モンゴル宮廷での屈辱と怒り、そして教皇や国王への復命書、といった条件からすれば、もはや答のわかっている答案であるかもしれない。が、ともあれ以下にたどることとする。⁸⁾

1 カルピニの東方

まさしく野蛮そのものであった。

まず自然と地理にしてからが、ダンテの地獄さながらに荒涼として不毛で、山岳と平地からなるそのほとんど全域が砂地であり、草木は少なく、森林も河川も都市もない。気候もまた異常で、夏ですら酷暑と厳寒が交互する。その他、すさまじい雷鳴、大雪、馬にも乗ってられぬほどの激しい風、何も見えぬほど濛々と立ち込める砂塵、猛烈な雹等々、そして結ぶこの国は：

広大ではありますが、その他は、私どもが己れが眼で見たかぎり、そこを五か月半にわたって旅して通ったところでは、私どもが説明できるよりもはるかに惨めです。⁹⁾

ここに素直に吐露されている印象、「惨め」¹⁰⁾がこの報告記の全体を貫く。それがカルピニにとっての、疑いようもない圧倒的な東方の現実であった。己が眼で視た東方は、確かにヨーハンネースの誇るとおり果てしのないほど広大ではあったが、ただそれだけで、何の魅力も、文明のかけらも、ましてやかのキリスト教王国も、その「無限の富と力」も「宝石の川」も、胡椒も絹も、絢爛豪華な宮殿

も、はては怪獣であれ奇蹟であれ東方の驚異すら何一つなかった。いや、驚くべきことはあった。驚くべき未開と野蛮が。

かくて、ヨーハンネースの支配下では珍奇なもの、文明と自然の豊かさを証するものとしてむしろ誇られていたものどもは、逆に否定すべきおぞましいものとして全編にわたって描かれることとなる。そして、前述の年代記の記事がそうであったごとく、この旅行記もまさしくヨーハンネースの書簡の裏返しの続編をなすのである。

まず地理とか気象とか、一定期間滞在して自ら観察したのであれば間違いのない自然現象が、事実概ねその通りだったのであろうが、その見本、その野蛮性を証明する格好の事実として挙げられることになる。例えば、「樹木が全くない」というそれだけでも驚くべきことに、したがってタルタル人は料理するときみんな：

貴人や他の者と同じように皇帝もまた、牛馬の糞でおこした火の側に座ります。

11)

といった具体的な細かな例が、誇張と驚きとともに付け加えられるのである。

自然現象についてすらもはやこうだとすれば、以下にたどってゆくごとく、人間と社会、その風俗習慣、目に見えぬ歴史、ましてや価値観やイデオロギーの絡む文化や宗教が対象となれば、それがどれほど過激なものとなり、また結果的にどのような効果をあげることになるか、すなわち個々の事実が直接観察された確かな客観的現実として、結局は自なる文明社会に対する異なる未開社会の野蛮を証拠だてるものとなってゆくか、容易に想像がつこう。

現にそれを証明するものに事欠かない。眼に入るものすべてがそうである。何よりもまず容貌であり、「顔面が広い」こと、「鼻が平らで小振りな」こと、「眼が細くて吊り上がっている」こと¹²⁾、髭がないこと、頭の天辺を剃っていること等々、自分たちのみならず「他のすべての人間と異なって」いる。つまり異様で、人間もまた「惨め」なのであった。衣服についても、当時の画によって今にも伝えられるその材料や型の異様さもさることながら、何よりも「男のも女のも同じ型をしている」ことに驚く。つまり、女性の美しさはどこにもなかった。住居についても同様である。フェルト作りであることなど、今も全く変わらぬあの包(ゲル)の材料と構造と建て方がそのままに解説されたあと、特記されるのは、ヨーロッパ人の住居の通念にとって最も驚くべきこと、すなわち取り壊し持ち運び組み立て自由で、戦であろうとどこであろうといつでも「一緒に持つて行く」ことであつた。にもかかわらず、そうした事実や、彼らのもとで唯一豊かな財産が馬であ

ること(「残りの全世界もこれほどたくさん持っているとは思えません」)から当然導きだされるべき、定住型農耕社会となったヨーロッパに対してモンゴル人の遊牧生活であることは、明確には説明されない。とにかくタルタル人の世界は、その国土と同じく生活もまた「惨め」で、あらゆる点で自分たちと異なったもの、従って全くの野蛮としか映らなかったのだった。

彼らの信仰もまた野蛮なものであった。というより、それを正しく観察し分析し記述する予備知識や思考をこの十三世紀の修道士に期待するほうが無理であり、すべては例によって偶像崇拜か占いと迷信として片付けられる。まず「人間の姿に作ったフェルト製の像」を祀ることから始まって、その偶像崇拜の細々としたことども、その形、作り方、置き場所、期待されるご利益、供え物、不敬や違反を犯したときの罰などが並べたてられる。そして最後に、キリスト信者がそれに従わなかったがために処刑された事件が、彼らの宗教弾圧の恐怖の例として紹介される。¹³⁾

事実はしかし、この点に関してはヨーハンネースが正しく誇ったがごとく、自然や産物に劣らず人種・民族・言語・文明そして宗教においてもアジアはその豊かな多様性を見せ、十字軍時代キリスト教ヨーロッパの狂信と偏見に比して、モンゴルの方がはるかに他宗教に寛容であったのだが、ネストリウス派キリスト教徒やイスラム教徒の存在からわかるようなモンゴル社会での信仰の自由については気が付かなかったのか、それともわざと無視したのか、それに言及されることはない。¹⁴⁾

人間の個々の行為は観察し記述することはできても、その価値基準すなわち倫理観を冷静客観的に述べることはいつの世にも困難である。その点はカルピニもあきらめたのか、ただひたすらこれまたその具体例を列挙する。なかんずく数々の理解不能な掟であり、例えば「ナイフを火の中に突き刺すこと」「鞭で弓に触れること」「乳その他どんな飲み物または食べ物であれ地面にこぼすこと」、さらには「幕舎の中で小便すること」等々の禁止である。しかしこの観察者は、それにどれほど遊牧生活にとって合理的な根拠があるか顧みようとはせず、それらをタルタル人の野蛮性を立証する軽蔑すべき迷信の例として利用するばかりである。最後の例として「幕舎の敷居を踏んだ者は殺される」という著名な掟を挙げた後、それに対して：

人を殺すこと、他の領土を侵略すること、いかなる不法な形でも他の者の財産を奪うこと、偶像を崇拜すること¹⁵⁾、人を罵ること、神の掟と禁止に反した行いをする事、これらは彼らの下では罪ではありません。¹⁶⁾

と結んで、自なる文明社会の倫理との対比を強調する。さては、モンゴル人の主要な信仰の形式であり行動の指針であった占いが「悪魔」の業、妖術として嫌悪とともに描写されることは述べるまでもあるまい。

人間そのものの判断において、ヨーロッパ人をすべて聖人君子に仕立て上げることはさすがに気が引けた。主人に対する忠実さ、争いや盗みのないこと、団結心・我慢強さ・女性の貞淑等々、モンゴル人の性格の長所がまずは一応公平に一種の驚きとともに挙げられる。事実、個々人の場合はともかく、民族的な規模ではもはや見出し難い徳であり、この場合はいい意味での驚くべきこととして自己相対化の契機となり得るはずのものであったが、それが自己への批判へと向かうことは期待できず、逆にタルタル人だけの自民族同士の人種的な団結心の証拠として矮小化され、「他民族に対しては」それらがすべて短所となって現れる、と否定的に判定される。すなわち、何よりも傲岸不遜で怒りやすく、我慢することができず、嘘つきで、満身これ陰険・詐偽のかたまりで狡猾、万事において不潔で欲深く、要するにタルタル人の「邪悪な性格をすべて書き出すと、余りに長くなるため不可能」なほどだ、と。

道徳とともに本来価値相対的な風俗習慣も、いつの世にもこれまた相対化されることの難しく、嘲笑や滑稽の具体例として利用されるものも少ないのだが、この観察者にとっても例外ではない。例えば食べ物の場合も、その材料や調理法よりもまずその異常性が取り上げられ、「食べられるものなら何でも」、犬・狼・狐・馬はては虱や鼠まで、そして最後に例によって、必要とあらば「人肉さえ口にする」習慣が持ち出される。またとりわけ顰蹙させたのは、テーブルクロスとかナプキンを使わぬこと、手を洗わぬこと、食器を洗わぬことなど、食事にまつわる習慣であった。一方では食糧の最後の一片・一滴まで利用すること、そして最後にモンゴル人の食事の貧しさと小食ぶりに言及されるのだが、それを彼らの野蛮さや卑しさの証拠として挙げはしても、遊牧生活の形態とその生活の厳しさから説明されることはない。

古今のあらゆる旅行家が観察を怠ることのなかった男女の関係について注目されるのも、当然ヨーロッパ的制度・慣習からして信じがたいこと、すなわち多妻制と今にも伝えられる父の死後子が養母を娶る制度である。その他、妻をその両親から高い値段で買い取ること、密通は死罪に処せられること、嫡子・庶子が区別されないこと、正妻と妾との間に仲たがいのないこと、また女性も戦闘要員として弓矢に優れること、などの驚異であった。

以上のような事柄が、内心ほとんど語るに値するものとは認めず、もっぱら「あるがままを残らず記せ」との教皇の命令に対する義務として記録されるのに対して、このフランチェスコ会士が最も精密に、しかも情熱込めて観察記録したのは

軍事力・タルタル人の武器や戦闘法についてだった。もっとも、「神がその味方になって戦うのを歓び給わぬ限り、独りで彼らに抵抗できる国はありません」と、その無敵不敗振りを認めながらも、ここでも例によってその強さの秘密は、「狡猾・陰険」さや、一人の捕虜も見逃さず、女子供まで皆殺しにしてしまう残虐性に求められてはいる。がこれは、復命書という性質や民族感情からして、彼らの強さを素直に認めることは立場上困難だったこともあろう。¹⁷⁾

以上がモンゴル社会と文化の個々の現象の具体的記述であるとすれば、その歴史や広大な帝国の全体はどのように位置付けられるか。そこから逆に我われは、カルピニあるいは当時のヨーロッパ人一般の歴史的・地理的世界像の一端をうかがうことができるはずである。

もっとも、この点でも答のわかっている答案であるかも知れない。地球あるいはユーラシア大陸の全体像は、ダンテやヨーハンネースにみたごとく理念的・抽象的イメージとしては存在しても、具体的・実地的な知識は乏しく、眼前に次々と展開する現実の全体的位置付けには役立つことは期待できず、聖書や伝説や古典によって理解・解説する他なかつただろうからである。また中世とは、その奇蹟譚や魔女裁判が物語るごとく、現実と想像、事実と物語をよく区別する基準はなく、事実や現実よりも幻想や理念や伝統が優位する時代であった。カルピニの語るアジアの地理およびモンゴル人の起源に関する若干の歴史もまた、そのような寓話的なものにならざるをえない。事実それを語るにあたって彼は、アレクサンデル東方遠征にならって、チンギス・カアンとその子孫による西方遠征としてたどるといふ形式をとる。

まずその起源は、「東方のモンガルと呼ばれる地」に「チンギスと呼ばれる男がいました」と、お伽話のような調子で始まるのだが、もちろんその男はアレクサンデルのような偉大な征服者として描かれるわけではない。「主の御前に勇敢な狩人でありました」（『創世記』10-9）と、武力によって国を建てた地上の最初の権力者ニムロデにたとえられ¹⁸⁾、悪党の首領としてメルキト人やナイマン人との戦いに勝って覇権を打ち建ててゆく過程が説話風にたどられるのみである。

その軍隊が最初に出会って戦ったのも現実の人間ではなかった。イミールの近くに住むという、「全くしゃべらず脚に関節のない」未開の人間であり、その化物はラクダの毛でフェルトを作って衣服の代わりにしたり、矢で射られても草で傷口をふさいで逃れ去る。その後はまた、ウイグル他の多くの国々を打ち破り¹⁹⁾、いよいよカタイをも破ってその皇帝となったが、その一部はまだ征服できぬままになっていると、マンジすなわち南宗の存在を漠然とながら伝える。足を印したのはカラコルムの手前までで²⁰⁾、実際には眼にしなかつたカルピニのカタイは次のごとくである：

キタイ人は異教徒で、独特の文字を持っています。聞くところによれば、旧約および新約聖書ももっているそうです。また教父たちの伝記や隠修士たち、教会のように建てられた建物を持っていて、その中で決まった時にお祈りをします。聖者も何人かいるとのこと。唯一の神を拝み、主イエス・キリストを崇め、永遠の生命を信じますが、洗礼はごくわずかしか受けていません。我らの聖書を讀え、キリスト教徒を尊敬し、多くの施しをします。彼らはとても寛大で親切な人たちのように思えます。髭はなく、顔つきはモンゴル人にとてもよく似ていますが、ただ、顔面がそれほど広くはありません。自分たち自身の言葉を持っています。ふつう人間が行なうどんな仕事であれ、彼らよりすぐれた職人は世界中どこにもいません。彼らの土地は、穀物・葡萄酒・黄金・絹、それにふだん人間本性が支えられるすべてのものに大層富んでいます。²¹⁾

カルピニが眼で見手で触れた現実の東方は、すでに見たごとく、古来様々な伝説や文献に伝えられたかの無限の富も偉大な文明も何もなく、ただ「どう説明していいかわからぬほど惨め」だった。とすれば、本当の東方はその彼方になければならない。それが、自分がたどり着いたカラコルムの彼方にあるといわれるカタイのはずである。これは、「幻想の逃げ水」現象とでも呼ぶべく、後にそのカタイにたどりついたポーロがその彼方にあるというジパングを黄金国に仕立てあげたのも、カリブの島々に着くたびにコロンブスがその奥地や彼方にジパングがあると信じたのも同じ現象である²²⁾。かくて、幾分控え目な調子ながら、豊かな富（「穀物・葡萄酒・黄金・絹」）、独自の文明（「世界で最も優れた職人」）、そして高度の宗教（「旧約および新約聖書、教父たちの伝記、隠修士、教会、聖者」²³⁾）が存在するはずとなる。

そして現地で伝聞した、それまで知られなかった新しい情報もまた、既成の東方・セレス像で解釈される²⁴⁾。その宗教は異教であることは確からしいが偶像崇拜ではなく、ほとんどキリスト教に近いものでなければならなかったし（「唯一の神を拝み、主イエス・キリストを崇め、永遠の生命を信る」）、タルタル人と違って独自の文字を持っており²⁵⁾、顔つきもモンゴル人と似てはいても違っていねばならなかった。かくて、敵対的で野蛮で軽蔑しか感じさせなかったモンゴル＝タルタル人に対して、カタイ人は好意的に描かれることになった：「彼らはとても寛大で親切な人たちのように思えます」と。こうしてまた、本当のカタイ中国の紹介はポーロの手に残されることとなった。

さてそれ以後も、チンギス・カンとその息子たちの軍隊はもっぱら昔ながらの空想のアジア世界を、そのどこかに生存していた化物や怪物と戦いながら突き進

んで行くのだが、ここでようやくかのヨーハンネースが登場する：

そして彼は、もう一人の息子を軍隊とともにインドに派遣し、小インドを征服しました。その黒人はサラセンで、エチオピア人と呼ばれています。その軍隊はさらに、大インドにいるキリスト教徒に向かって進軍しました。その地の王は普通ヨーハンネース・プレスビテルと呼ばれています……。²⁶⁾

かつては三つのインドを越えて太陽の昇るところまで、東方全体を支配下に治めていたかの伝説の王も、かくて十三世紀半ばには、インドの一つを支配する一介の王すぎなくなりました。しかも、今や東方の新たな覇者たる、おそらくかつて服属し貢納していた七十二の地方の王の一人、異教徒たるチンギス・カンの軍隊の攻撃の前にさらされている。ビザンチン皇帝に対して異なるものの存在を誇り、それを徹底的に叩くこともせず、宣教の努力も怠っていたヨーハンネースは、今その付けを払わなければならなくなったわけである。されども、衰えたりとはいえキリスト教徒であることには変わらない。とすれば、ここで勝利するのはかつての司祭王の方でなければならない。事実、もはやコーカサスの岩山に閉じ込められた食人種を呼び出して差し向けることのかなわぬヨーハンネースは新兵器、「銅で作った人形を馬の鞍に乗せその中に火をつめた」ギリシア火薬をもってよく抵抗、タルタル人も二度とそこへ侵入することはなかったのだ。²⁷⁾

チンギスの軍隊は、その後も女の姿をした化物や厚い氷の衣で蔽われた犬人、ブリタベト(チベット)では例の「父が死ぬと家族が集まってその死体を食べる」という食人種²⁸⁾、コーカサス地方カスピ山脈では山に穴を開けて地下に隠れ住む住民たち²⁹⁾、と戦って、勝ったり負けたりしながら進軍してゆく。

一方、これら怪物や魔物たちとの戦いの歴史と地理の間に、簡単ではあるが多少とも事実に近い情報が、多くのささいなエピソードとともに同じような文体で挿入される。チンギス・カンが多くの「法令・法規」つまりヤサを作り、それが不可侵のものとして守られていること。その軍隊が「千人長・百人長・十人長そして万人長」を指揮者として編成されていること。大カンの家族、四人の息子たち、バトゥやスブタイら主だった武将たち。皇帝の絶対的な権力、その支配形態や貢納の制度。チンギスの死後、オゴタイが皇帝に選ばれ、西方遠征に送り出されたこと。バトゥの軍隊は、大スルタンの国(フアーリズム王国)、ビセルミン人の土地(イスラム人の地)、トルコ人の地(ウイグル人の地)を進んで多くの町を破壊したのち、ロシアを攻撃し、その首都キエフを劫略、ついに知ってのごとくハンガリー・ポーランドに侵入し、その戦闘にも勝ったこと、等々である。

その後はまたしても空想の地理と歴史に戻る。さらに北行して、小さい胃袋と

ちっぽけな口しか持っていないため、肉料理の湯気が唯一の飲食物である「パロツシト人」のところを通り、さらに前進してサモイェド人の地を過ぎ、北の大洋に接するところでは、足が牛、頭は人間、顔は犬の犬頭族に出くわす、がその言語は理解できた。その後南進し、アルメニア人のところでは、手も腕も足も一本のいわゆる「一本足人」と戦い、後には講和のためにその連中の使節が皇帝の宮廷にまでやって来たほどである。³⁰⁾

そして最後に再び、タルタル人は現在アレppoのスルタンの国やバグダードのカリフの国を攻撃しつつあると現実に戻り、「その彼方にある他の地を攻撃しようと企んでいます。その後現在までまだ自分の地に帰っておりません」と、その意図が世界征服であり再びヨーロッパ侵略の可能性のあること、タルタル人の脅威の未だ完全には去っていぬこと、を警告して締めくくられる。

では、道中カルピニは実際にそうした化物を目撃したであろうか。以上のいわば前半が東方の偵察記・調査報告記であるとすれば、それに続く最終章第九章は道中の出来事を記した旅行記であり、後世の史家から貴重な文献として重んぜられるのもこの部分である。³¹⁾

もちろんそこには化物も怪物も登場せず、かわりにバトゥやクユク、前皇帝オゴタイの皇后トゥラキナら歴史上の人物、ドンやヴォルガ、サライやシラ・オルダなど、現実の地理が登場する。その意味で確かに貴重なものであろうが、しかしインパーソナルライターと呼ばれたマルコ・ポーロのような旅行記とはおよそ異なり、公平で客観的であろうとする事実観察とその記録であるよりはむしろ、道中の些細な出来事や旅の困難、エピソードや私的な感情を細々と連ねた個人的な旅日記であり、ここでも異なる世界に対する一方的・敵対的な野蛮視や、驚くべきことどもばかりに注目するという叙述態度は一貫して変わるわけではない。

まず、ポーランドとロシアで情報を収集し旅仕度を整え、「蛮族の国々に向けて出立」して以来常に悩まされたのは、タルタル人の世界では何をするにも贈り物をしなければ事が運ばぬという不愉快であり、進物をしてようやく面会してくれた最初の首長コレンザの天幕やその他どこでも、「戸口の敷居を踏まぬよう」厳重な注意を受けたり、「三度脆かされ」たり、浄めのために「火と火の間を通らされる」屈辱を忍ばねばならなかった³²⁾。バトゥの本営でも進物を要求され、それなのに与えられた食べ物はわずか腕一杯の黍だけであると、遊牧民の厳しい生活は貧しさの証明としてしか映らない³³⁾。また、一日に何回も新しい馬に乗り換えた強行軍のことを嘆くことはしても、それが完備した駅通制度の証明であることや、多分一行が与えられていたであろう通行証パイザや特権は言及されない。かつてチンギスの軍隊が通ったときは、化物や怪物の棲み家であり、それと戦わなければならなかったコマン人の国やカンギト人の国は、現実には「死者の骨が地上に

山となって」おり、ピセルミン人の国では「無数の廃墟になった都市や無人の村」があるばかりであった。

いよいよ皇帝の本営シラ・オルダに到着し、折からクユク・カアン選出のために開かれていた宮廷会議クリルタイを目撃する。宮廷といっても確かに二千人以上もの人間が入れるほど大きいことは大きい、白いビロード製の大テントが建てられているだけで、その周りには木の柵がめぐらせてあるにすぎず、かのヨーハンネースの宮殿とは比べようもない。しかしそこには、ロシアの大公やカタイやソランギ（満州）の首長、ジョルジアの王子やバグダードのカリフ、イスラムのスルタンら、「世界各地からやって来た四千人以上もの使節」が集まっており、この点ではかの司祭王の宮廷を凌いでいた。彼のような異教徒や旅の者も一様にもてなされた点でも同じだった。もっとも、その内外でいつ果てるともなく行われていたのは馬乳の酒盛りであり、禁欲的な司祭王の会食とはおよそ違っていたが。

「黄金オルダ」と呼ばれるその皇帝の本営で、カルピニはようやくかの東洋の豪華をしのばす富の一端を眼にする。天幕は、黄金の延板と釘と錦で作られ、その中には各国の使節から贈られた絹布・金糸・ビロード・上等の毛皮など献上品が山と積まれており、彫刻を施した象牙造りの皇帝の玉座には宝石や真珠がびっしりと散りばめられていた³⁴⁾。また外には「黄金・銀・絹衣などを満載した」五百台以上の車が停まっており、皇帝や首長たちの間で分配され、さらに部下たちに惜し気もなく分け与えられた。といっても、彼ら仲間達の間だけであり、すべての者に差別のないというヨーハンネースの理想的平等社会ではなかった。

その黄金オルダでようやくの皇帝の謁見を受け、旅の使命を申し立て、後にモンゴル語で書かれた返書を受け取ったのだが、カルピニによればクユク・カアンは：

四十歳か四十五歳、あるいはそれ以上かも知れません。背丈は中くらい、とても慎重でまったく狡猾、非常に真面目で振舞いは重々しい。……軽々しく笑ったり、無分別なことをすることは決してありません。彼の宮廷にいるキリスト教徒たちは、皇帝はキリスト信者になるにちがいないと確信している……³⁵⁾

そうであった。その証拠として挙げられているのは、宮廷内にキリスト教聖職者（ネストリウス派の司祭）がおり、皇帝から援助を受けていること、本営の前に礼拝堂が建てられており、そこで礼拝が行われている、という事実である。さすがにカルピニも本当にはしなかったが、しかしそれが、すべての宗教を建前では平等に扱うというモンゴル政権の宗教政策であることは見抜けなかった。

かくて、使臣を同行させたいとの皇帝の申し出を、軍事的・政治的深慮により断り、帰路の道中またしてもタルタル人の盗みや贈り物の要求に煩わされながらも、無事ヨーロッパに帰り着き、道中出会った多くのキリスト教徒を、自分が「本当にタルタル人のもとに行つたこと」を証言してくれるはずの証人として挙げて、この「私どもによってタルタル人と呼ばれるモンゴル人に関する報告」は終わるのである。

因みに、クユク・カアンが彼に託したイノケンティウス四世宛返書は、ところがこの修道士の旅行記に描かれたモンゴルとおよそ違し、まさしくかの『書簡』さながらに堂々として尊大、キリスト教ヨーロッパを問題にもせぬ自信に満ちあふれたものであった：

神の力によりて、日の昇るところより日の沈むところまで、すべての領土は朕に与えられたり。神の命令によらずして、何びとかいかでこれをなすを得んや。今や汝、真心込めてこれを言え、「我らは臣なり、我らは我らの力を捧げん」と。汝みずから、すべてこぞりて、諸王の先に立ち、来たりて朕に仕えて臣となれ。しかるときには、朕はなんじの臣従を認めん。しかして、もし汝、神の命令に従わず、朕の命令に背かんか、汝は朕の敵たるべし。これ、朕がなんじに諭すところなり。もし、汝これに背かんか、朕は、そのいかなることになるやを知らず、神のみぞこれを知りたもう。³⁶⁾

ヨーハンネースはやはりいたのである。かのごとく「神」を戴き、「日の昇るところから沈むところ」までの領土を支配、七十二人どころではない「諸王」を臣従せしめて。ただ、その神がキリスト教のそれではなく、自らをプレスビテルとは称していなかっただけである。カルピニによって故意に卑小化され無視されたこのヨーハンネースは、だからこそ、最初に引いたごときマルコ・ポーロの偉大なクビライに甦り、人々の幻想を掻き立てることになるのであった。³⁷⁾

2 おわりに

カルピニの旅行記や、対象の記述においてはより詳細・正確かつ公正・客観的だが、その叙述の姿勢および東方観においては基本的・全体的にこれと変わらぬルブルクの旅行記は、すでに述べたごとく、現存する直接ヨーロッパ人の手になる最初の東洋観察記としてそれ自体貴重な文献であるばかりでなく、当時の西アジア・中央アジアの風土・民族・宗教、モンゴルの社会と文化の記述として、さ

らにはまたカアン選出のクリルタイという歴史的出来事を目撃証言として、またククやモンケの宮廷の様や彼らとの謁見の当の本人による描写として、とりわけ東西交渉史では希有な史料として後世に高く評価され、用いられてきた³⁷⁾。たとえば、ユールによれば、「コミュニケーションの困難さや不完全な通訳にもかかわらず、アジアの自然・地理・風俗・習慣のみならず宗教・言語等についてもあるがままの、あるいはそれに近い多くの詳細な事実が収録された」。³⁸⁾

実際、簡単ながら上にたどってきたごとく、そこにはそれら項目についての詳細な観察とその報告が見られたし、それらがあるがままかそれに近いものであることは今も証明されつつある。また、アジアの地理、モンゴルの軍事・行政形態、漢字や紙幣など、初めてヨーロッパに伝えられたことも数多い。では東方アジアは、ついに幻想のベールを脱いで本当の姿を現し、よく現実のものとなり得たか。

そうではあるまい。これまた上にみたごとく、彼ら十三世紀の修道僧たちが記したのは、その自然と地理、衣服や容貌、住居や食物、武器や戦法など、個々の具体的な事物や現象の詳細であり、それら個々の事実の列挙はされても、そこからそれなりの合理性を持ったモンゴルの社会と文化の全体像が浮かび上がってくるわけではなかった。そのため、観察の対象が宗教・信仰・道徳・民族性といったいわば眼に視えぬものとなるときは、それが外へ現れた形、すなわち信仰の道具や細々とした迷信、具体的行動やそれにまつわるエピソードが記されるほかになく、しかもそれらは、もっぱら野蛮の証明として持ち出されるばかりであった。

また事実と理念、現実と幻想の対立、後者が前者に優位し支配する一つの象徴的な例が、カルピニ自身が西から東へ旅したユーラシア大陸とチンギス・カンの軍隊が東から西へ遠征した同じ地域の違いであろう。カルピニが通ったアジアは、ただ荒涼とした山岳や砂漠が続くばかりであり、どこにも妖怪変化は棲んでいず、たどり着いた東方の君主の都はただ「惨め」で、東洋の豪奢はどこにもなかった。ところがわずか数年前、モンゴルの軍隊の横切ったアジアは、古来お馴染みの怪物や化物が棲み、富めるカタイはなお彼方に存在し、色褪せたりとはいえヨーハンネスも健在だった。しかもカルピニにとっては、その二つとも現実であり、否むしろ、前者は自分だけが眼にした、他の誰も信じてくれぬかも知れぬ——カルピニがその報告記の最後に執拗に多数の証人の名を挙げているのはそのためである——いわば語るに値するようなものは何もない、惨めで野蛮な東の方であり、むしろ幻想であって、後者こそ古代・中世の権威によって文献に伝えられ、誰もにとって具体的イメージを呼び起こす本当の東方であり、そちらの方が真実でなければならぬのだった。

とすれば、かくして出来上がったこれら報告書が、その動機や意図とは別に、同時代や後世の社会と人々によっていかに受け止められ、どのような役割を果た

すことになったか想像に難くない。こうして初めて直接もたらされた新たな現実、異なる世界の新たな驚くべきことどもは、既成の東方像を訂正するどころか、その確かな<異性>の否定的な証明としてその中に取り込まれ、細部を構成する具体的材料としてその全体像を追認・精密化し、ひいては自文化中心のキリスト教ヨーロッパの普遍主義とその世界像を補強・強化することになるのである。

現にカルピニの旅行記は、同時代のヴァンサン・ド・ボーヴェの百科全書にすぐ収録され³⁹⁾、あるいは著名な十四世紀の空想旅行譚マンデヴィルの『東方旅行記』に剽窃されることによって⁴⁰⁾、ポーロの書に劣らず、当時のそして何百年にもわたって後世の人々のオリエントのイメージを定着させ増幅する役割を果たすことになる。⁴¹⁾

どのように受け取られ取り込まれたかは、その一、二を見るだけで充分であろうが、例えばマンデヴィルでは、「エルサレムへ赴くもう一つの道」として紹介されるカタイの大カアンの領土にあるタルタル人の国を述べるにあたっては、前に引いた冒頭の部分がさつそくそっくりそのまま利用される：

この国は極めて厄介な土地で、砂地ばかりで、ほとんど草本は実らない。……その代わり、獣は豊富である。……木材は乏しいか、太陽で乾した獣の糞で食事を調理する。そして食事は貴賤の別なく一日一回で、しかも一回の食事の量は極めて少ない。……彼らは誠に不潔で極端で敵意に満ち満ちている。……この地域を治めている王族はバコ[バトゥ]と呼ばれ、オルダと称する都に住んでいる。実際に、この国にはまともな人間は住めないだろう。⁴²⁾

あるいはまた、カルピニの列挙する前述のごとき迷信をそのまま引いた後のコメントは：

人間の犯し得る最大の罪悪は、彼らの話によると、人間の住む家屋の中で小便することだそうである。そこで小便をしたことが他の人にわかると、彼らはその男を殺してしまうだろう。⁴³⁾

十九世紀末から今世紀におよんでのヘディンやスタインを始めとするいわゆる科学的・学術的探検によって、中央アジアや東アジアの地理や民族や風俗についてのその記述が正確・詳細であることが実証されるにつれ、これら旅行記の史料としての価値が高まり、後世の東西交渉史や民族学の研究者によって、もっぱらその個々の事物や現象に関する詳細な観察や実証的な記述に光が当てられてきた。事実これら旅行記が、その住ま居や服装にみられるごとく今に変らぬモンゴル遊

牧民の生活や社会、風俗や宗教の実態を報告していることはそのとおりであろう。

だからといってしかし、近代的な合理的精神でもって客観的・科学的に記述されているわけではなく、その報告が現実そのままであると考えすることはできないことはすでに見た。個々の具体的な事物や現象、いわば目に見、手で触れられる、そのまま記述する他なく間違いのない事柄や細部については、客観的・正確であっても、それだけでも価値あるものではあるにしても、その全体的な文化や社会についてはその内部に立ち入って考察することはせず、現象の記述にとどまり、しかもその記述態度は、「異なる世界」の「驚くべきことども」の列挙に終始していた。またそうしたモンゴルの社会を位置付ける全体的な東方観や世界像は、既成の中世キリスト教的な枠をさほど出ることなく、ヨーハンネースの東方と基本的に同じものであることは前章にみたとおりである。

事実は事実であり、それがいかなる意図やイデオロギーや世界観から記述されようと、客観的に実証される限り、それを認めるのが科学的な態度であろう。と同時に、その逆が行われてもなるまい。それが事実であるがゆえに、それらによって構成される全体が現実そのままであり、その背景にあるイデオロギーや世界観が正確な現実をふまえたものである保証は必ずしもないからである。

とすれば、彼らの報告から、今なお有効な正確で実証的な個々の事実のみを取出し、それらによって構成される全体像や、その背後にある世界観や価値観を等閑視するとすれば、それは片手落ちというものであろうし、ましてや、いくつかの正確な事実をヨーロッパに初めて伝えたことに大きな意義を見出すとすれば、それこそ、最初に述べたごとく、近代の序曲としての地理的知識の拡大の時代の先駆という文脈で、後世からするすべてを西洋近代へと流れ込ますヨーロッパ中心主義的な本末転倒というほかになく、むしろ実際には、すでに指摘したごとく、当時の人々には、ポーロやマンデヴィルの書と同じく空想旅行譚、異界物語として受け取られ歓迎されたのであって、古代・中世の権威の書や文献、聖書や伝説によって語り伝えられてきた東方像を、その後も何世紀にもわたって追認し補強し増幅しこそすれ、それを根本的に修正・変更・破壊するものではなかったのである。かくてその後圧倒的となる、＜文明＞ヨーロッパに対する＜野蛮＞アジアの構図の最初の具体的・現実的証明が出来上がり、タルタル・モンゴルはその象徴としてヨーロッパ人のイメージの中にその後も変わらず生き続けることになる。

ここでその後のモンゴル像の変遷を順次たどる余裕はないが、その例には事欠かない。たとえば典型的な一つが、十八世紀啓蒙主義時代のモンテスキュー(1689-1755)のモンゴル観であろう。そこではタルタル人は、「蛮民」たる遊牧民族の代表として、何よりも「ヨーロッパの自由」に対する「アジアの隷属」の見本として挙げられる：

アジアの帝国の諸人民は棍棒によって統治され、タルタルの人民は長い鞭によって統治されている。ヨーロッパの精神はこうした習俗とは常に反対であった。そして、あらゆる時代において、アジアの人民が処罰と呼んだものをヨーロッパの人民は凌辱と呼んだ。⁴⁴⁾

冒頭に引いたブツァーティの『タルタル人の砂漠』に、そうした最近の例の一つを見ることができよう。そこでは、モンゴル人は何よりもまず、「惨め」な荒涼たる「北の砂漠」からいつししか襲撃してくるに違いない、「細い目」*gli occhi sottili*の恐ろしい「謎のような顔」*le faccie ermetiche*をした敵であり、コミュニケーションをいっさい拒否するその得体の知れぬ不気味な「異様さ」は、同じ戦士でも、武勲詩に詩われたような甲冑に身を固め、化粧回しを垂らした馬にまたがった中世ヨーロッパの華やかで英雄的な騎士とはおよそ違い、蟻のような個性のない「うようよとした群」*formicolio*をなし、「音楽も歌も輝く剣も美しい旗も」持たぬばかりか、馬すら「いななかぬよう訓練してある」ほどなのであった⁴⁵⁾。もっとも今では、その「不思議さ」「無意味さ」が、文明に疲れた現代人を惹きつけ、新たな幻想の契機となるのであるが：

北の砂漠から好運が、冒険が、誰にも少なくとも一度は訪れる奇蹟の刻が、やってくるに違いなかった。時ともにますます不確かになるかに見えるこの漠然としたありそうにもない出来事のために、この山の上で大人たちが、人生最良の時期を無為に過ごしていた。⁴⁶⁾

1) 初出：「愛媛大学教養部紀要」23, 1990, pp. 41-60。

2) イギリス王ヘンリー三世に仕えた年代記作者マシュー・パリス Matthew Paris (ca. 1199-1259)の『大年代記』*Chronica Majora*, 1240年の条；W. W. Rockhill, *The Journey of William Rubruck to the Eastern Parts, 1253-55*, London, Hakluyt Society, 1900, pp. xiv-xvii；岩村忍 [1941], pp. 51-2 (引用同書)。* [拙訳 マシュー・パリス「大年代記」『原典中世ヨーロッパ東方記』名古屋大学出版会、2019]。

3) 同上。

4) 一番最初は、すでにモンゴルの東欧侵入以前の1235年、ヴォルガ河畔のブルガル地方にまで至ったドミニコ会士ユリアン（1237年秋にも再び東方に渡る）。その報告が、ヨーロッパに伝えられたモンゴルに関する生の情報の最初のもので、当時すでにロシアに侵入しつつあったモンゴル軍の強さ、恐ろしさを警告した。次は東欧侵

入以後となり、1245年教皇インノケンティウス四世によるもので、一つはここに取り上げるカルピニ一行、もう一つは、アルメニアに駐屯するモンゴル將軍バイジュの障営に至ったドミニコ会士ロンバルディアのアンセルム、サンタンカンのシモン、アルバート、アレクサンデルら四人の一行（1245-47年）。その次が、フランス聖王ルイにより派遣されたドミニコ会士ロンジェモーのアドルー、カルカツソンのジョン・ウィリアムの一行で、イルミ河畔のオールドで摂政の任にあったオグル・ガイミシュのもとに至った（1249-51年、前章注35）。同じくもう一つのものが、ここに触れるルブルクの一行である（1253-55年）。＊〔拙訳 シモン・ド・サンカンタン『タルタル人の歴史』前掲同書〕。

- 5) *The Mongol Mission*, ed. C. H. Dawson, New York, AMS Press, 1980 (初版 1955), pp. 75-6; ドーソン前掲書 2, pp. 286-7 (引用同書); 佐口透前掲書, pp. 57-9. ＊〔拙訳「タルタル人皇帝宛インノケンティウス4世書簡」前掲同書〕。
- 6) ヨーハンネース・デ・プラノ・カルピニ Johannes de Plano Carpini: 1182年頃イタリア・ペルージャ地方に生まれ、アッシジの聖フランチェスコの弟子となる。1221年東欧に派遣され、ドイツ・ポーランド・ハンガリー・ボヘミア各地を説教して回り、後にスペインに移る。1243年教皇インノケンティウス四世（ジェノウァ人 Sinibaldo Fieschi, 1243-54）の聴罪司祭に任命され、1245年その東欧経験を買われて使節としてモンゴリアに派遣される。帰国後、ダルマティアのアンティヴァリ Antivari の大司教に就任し、1252年同地没。その東方行は、1245年4月16日ボヘミアのステファンを伴ってリヨン発、ブレスラウでポーランドのベネディクトゥスを同伴、クラコウを経てロシアの首都キエフ着、1246年2月3日同地を発ち、ドニエプル河畔モンゴル軍前衛の首長コレンザと会い、バトゥのもとに送られる。黒海沿岸からコマニア地方を横断して、4月4日カスピ海北岸ヴォルガ河畔のバトゥの本営着、謁見して教皇の書簡を手渡す。バトゥからカラコルムの大カアンの宮廷に赴くよう命じられ、ベネディクトゥス修道士と共に4月8日発、カスピ海北岸、コマン人の地、アラル海北岸、トルキスタン、シルダリア川沿いにカラキタイに入り、ナイマン人の地、外モンゴリアを通過して、同年7月22日、約四か月半の旅の後、折からクユク・カアン推戴のクリルタイの開かれていたシラ・オールド（カラコルム手前の夏の宮殿）着、皇帝に選ばれたクユクに謁見し、教皇の書簡を奉呈した。同地で四か月足らず滞在の後、返書を受け取って同年11月13日帰途に就き、ほぼ同じルートをたどって翌1247年5月9日バトゥの本営着、6月9日キエフを経て秋にリヨンに帰り着いた：前掲各書その他、Ruggero Ruggieri, *Marco Polo e l'Oriente Francese*, Roma, Bari Nantes, 1984. なお後に、フランチェスコ会士 C. de Bridia がカルピニ一行の旅をもとに1247年に、*Historia Tartarorum* (G. D. E. Painter, 1965) を書いている。

7) ギョーム・ド・ルブルク *Guillelmus de Rubrucci* : 生没年や経歴は不詳、ca. 1220-90。フランドル-リュブリュキ出身、フランチェスコ会士。フランス王ルイ九世の十字軍に従軍してキプロス島滞在中モンゴル行きを命じられ、クレモナーのバルトロメオ修道士、聖職見習いのゴッセト、通訳アブドゥッラー、奴隷少年一人を伴って1253年5月5日コンスタンチノーブル発、黒海からクリミア半島ソルダイアに渡り、サルタクの宿営を経て、8月5日ヴォルガ河畔サライでバトゥに謁見、カルピニと同じく大カアンのもとに赴くよう命じられ、12月27日カラコルム南のオールドに至り、翌1254年1月4日モンケ・カアンに謁見、ルイ王の親書を奉呈する。4月カラコルムに伴われ、約5か月滞在の後、8月同地発、往路とほぼ同じコースをたどって9月15日バトゥの本営着、その後はカスピ海西岸沿いに陸路をとり、コーカサス山脈、アルメニアを経て翌1255年6月16日キプロス島着。王はすでにフランスに帰国して不在だったが、アッコで復命書を書き上げた。ルブルクは、フランチェスコ会士でありながらルイ九世によって派遣され、その復命書も仏王宛で教皇宛ではなく、教団に保存記録されなかったためか、カルピニのそれのように世に出ず、後世にもイギリスのロジャー・ベイコンの *Opus Maijus* を通じて知られるだけだったという。事実、ヴァンサン・ド・ボーヴェの百科全書にも引かれず、マンデヴィルでもそこからとられたのはわずか一か所とされる。ルブルクは、1248年初めフランス王の宮廷で、教皇から遣わされた折から東方から還ったばかりのカルピニ、ベネディクト両修道士と出会って直接話を聞き、様々な情報と助言を得たと見られる (Rockhill, *op. cit.*, p. x)。両者の旅行記は事実、その構成と前半報告記の部分に共通する点が多いが、後半旅行記の部分はルブルクにおいてはるかに長くかつ詳しく、近代に入ってより高く評価される理由となっている。

8) カルピニにおよびルブルクのテキストは下記に拠った : *Sinica Franciscana*, vol. I, 'Itinera et Relationes Fratrum Minorum, Saecli XIII et XIV', ed. P. Anastasius von den Wyngaert, Clara Aquas (Quaracchi-Firenze), Collegium S. Bonaventurae, 1929 (Iohannes de Piano Carpini, *Ystoria Mongalorum*, pp. 27-130; *Guillelmus de Rubruc, Itinerarium*, pp. 164-332)。

カルピニの写本は、前半報告記の部分は六つ、後半旅行記の部分は四つ伝わっており、上記はそのうちケンブリッジ *Corpus Cristi College* 所蔵の13世紀写本を底本としている (pp. 11-20)。ルブルクについては七つ挙げられており、同ケンブリッジのものを底本とするが、諸写本間の異同は主に語句の綴りに関するもので、問題ないとされる (pp. 158-9)。同時に下記の諸版を対照した : W. W. Rockhill, *op. cit.* (カルピニは、後半第9章の旅行記のみ収録し前半報告記の部分は省略されている) ; C. H. Dawson, *op. cit.* (上記 Wyngaert 版からの英訳) ; カルピニ/ルブルク (護雅夫訳) 『中央アジア蒙古旅行記』光風社、1989 (上記 Dawson 版からの和訳)。以下、

主たる引用箇所についてはこれら各版のページを示す（短い語句については省略する）。＊〔拙訳 カルピニ『モンガル人の歴史』前掲同書；ルブルク『旅行記』同。本稿末尾に BnF 写本 Dupuy 686 (1647 年)からそれぞれの最初のページのコピーを掲げる（図 3・4）〕。

カルピニについては、いわゆるラムージョ版 Giovanni Battista Ramusio, *Navigazioni e Viaggi*, Torino, Einaudi, 1983 (初版 1559), vol. IV, pp. 203-64, 'Due viaggi in Tartaria per alcuni frati mandati da papa Innocenzio IV'も参照したが、これは中世の著名な百科全書ヴァンサン・ド・ボーヴェ『歴史の鏡』Vincent de Beauvais, *Speculum Historiale* 所収ラテン語版のイタリア語訳、G. Antonio de Nicolini da Sabio, *Opera dilettevole da intendere, nella quale si contiene dei itinerarij in Tartaria per alcuni frati dell'Ordine minori e di San Domenico, cioè frate Giovanni e frate Simone, mandati dal papa Innocenzio IV, nella detta provincia di Scitia per ambasciatore*, Venezia, 1537,をそのまま収録したもので、同訳は原写本を大幅に削除・改編しているのみならず、前述バイジェのもとに至ったアンセルム修道士の一行に加わっていたシモン・ド・サンカンタン(注 4)の報告記と混ぜて集成しており、価値は低いとされる。事実、上記他の諸版とはかなり異なり、読者にとって興味が薄いと思われる前半報告記の部分が大幅に省略されている。後者のみを編んだものとしては、Simon de Saint-Quentin, *Histoire des Tartars*, par Jean Geuthner, Paris, 1965,がある。

9) Wyngaert, p. 32; Dawson p. 6; 護 p. 6。

10) 原文は<villior> (<vilis>の比較級形)、<安い・価値のない>の意だが、モンゴル全体に対する印象と評価ともなっているので、護訳「惨め」(Dawson: *wretched*)をそのまま借用する。

11) Wyngaett p. 30; Dawson p. 5;護 p. 5。

12) 護訳では、「まぶたは眉毛まで持ち上がっています」(p. 7)(Wyngaert: *palpebras usque ad supercilia elevatus* ; Dawson: *their eyelids raised up to the eyebrows*)とし、「これがどういう状態を指しているのかよくわからない」(p. 91)と註記されているが、まぶたの端が眉毛まで持ち上がっていると考えれば、要するに「目が吊り上がっている」ことを指すのではあるまいか。こうした身体的特徴の記述、とりわけ「吊り上がった目」は、出っ歯や低い鼻とともに東アジア人を描くときのステレオタイプとなって現代に至るまで脈々と受け継がれていることは戯画等でお馴染みのおりである。因みに、ドーソンもカルピニによっており、まったく同じ文体である：「これらタタル種族の容貌は中国人と非常によく似ているが、世界の他の諸民族とは容易に区別できる。眼は褐色で、その位置は斜めに鼻に向かい、頬骨が出ているので、眼がおさえつけられたようになっていて、十分に開いていない。頬は広く、鼻は低

- く、唇は厚く、顔と頭は丸く、顔色はオリーブ色を帯び、顎髭はほとんどない」(前掲書 1, p. 12)。
- 13) ロシアの大公ミハイルが、バトゥの宮廷でチンギス・カンの像の前で脆くよう命じられたのを拒否したため、蹴り殺されたという事件 (1246 年 9 月)。すぐ後にまた、ロシアのチェルニゴフ公アンドレイが処刑され、その弟が、モンゴル人の習慣に従って兄嫁を娶るよう命じられたが、キリストの教えに背くと断ったにもかかわらず無理矢理床を共にさせられた事件が、タルタル人の恐怖すべき圧政の例として紹介されている。ちなみにドーソンでもこれらは、「モンゴル人の野蛮さを特徴付ける二、三の事実」として引かれる (前掲書 2, pp. 239-40)。
- 14) ルブルクは、モンゴリア及びカラコルム宮廷での宗教について詳細に観察・報告しており、この点が両者の旅行記において最も異なるところとなっている。またそこから、軍事偵察としてのカルピニと宗教・社会視察としてのルブルクとの両者の旅行の目的と性格の違い、対モンゴル防衛としての教皇と対イスラム提携としての仏王の、両派遣主の関心と意図の違い、さらにはモンゴル侵入に対する、8 年を隔てた危機感の強弱が窺える。
- 15) 原文 *fornicari*; Dawson *to commit fornication*, 護 <姦淫すること>。どちらともとれる。ラムージョでは省略されている (p. 215)。
- 16) Wyngaert p. 41; Dawson p. 11; 護 pp. 14-5。
- 17) 全 9 章のうち第 6・7・8 の 3 章が充てられる。ルブルクでは軍事への言及はごくわずかしかない。
- 18) Wyngaert p. 52 ; Dawson p. 19 ; 護:p. 25。
- 19) ウイグル人については、「ネストリウス派のキリスト教徒である」こと、「モンゴル人は彼らのアルファベットを取り入れた」ことを報告している。
- 20) カラコルムは、カルピニ「とても大きいと言われている」(第 1 章)、現実にそこに足を踏み入れたルブルクでは「サン・ドニの村ほどの大きさもない」(第 32 章)。
- 21) Wyngaert pp. 57-8; Dawson pp. 21-2; 護 p.28。ルブルクのカタイも大なり小なり同じようなものである：「その彼方に大カタイがあり、思うにそれは、古くはセレスと呼ばれていたところ。その国民の名をとってセリクと称される最上の絹布がそこからや来るのですが、その国民がセレスと呼ばれるのは彼らのある町の名に因んでいます。確かに聞いたところでは、その国には銀の城壁と金の砦を持った町があるそうです。その地は多くの地方に分かれ、そのいくつかはまだモンゴルに服属していません。それらとインドとの間には海があります。このカタイ人は小柄で、鼻から強く息をしながらしゃべります。東洋人はすべて小さな眼孔をしています、ここでも一般的です。彼らはどんな技術であれ極めて優れた職人で、その医者は薬草の効能に精通し、脈からとても上手に診断します。しかし、尿瓶は用いず、尿につ

いては何も知りません。……どんなものであろうと父親のしている仕事に息子もすべて就かねばならぬ習慣に昔からなっており、彼らが多くの貢納を払うのもそのためです。これらの国民はすべて、コーカサス山脈、しかしその北側、と東の大洋までと、モンゴル遊牧民の住むスキタイの南の部分の間に住んでおり、すべてその貢納者です。また、すべて偶像崇拜に耽っており、私どもの詩人がするように、多数の神々や神と化した人間、神々の系譜を作り上げています」(第 26 章、Wyngaert pp. 236-7; Rockhill pp. 155-7; Dawson pp. 143-4; 護 pp. 206-7。広大な領土が「多くの地方に分かれている」こと、それらの国民が「すべてその貢納者である」こと等は、ヨーハンネースの記事を思わせる)。

ここでも、中国についての古くからの伝承(広大な領土、絹、金銀造りの町、優秀な職人等)以外に多少なりとも正確な新しい情報(カタイが昔のセレスであること、地理的位置、薬草の知識等)とともに、滑稽な記述や奇妙な解釈(尿のこと、神々につて等)が付け加わっているのが見られる。しかしカルピニと較べれば、怪物・化物の登場は少なく、それだけ情報が正確になってきている。

22) 例えば、18 世紀のスウィフト『ガリバー旅行記』では、ラピュータ、バルニバービニ、ラグナグ等の空想の国々はそのジバング日本の彼方、アメリカとの間の大洋の島々に置かれることになる。

23) ロックヒルによれば、「旧約聖書」は五経、「新約聖書」は四書、「聖者」は孔子・孟子・老子、「唯一の神」は天 (Rockhill, *op. cit.*, p. 155, n. 1)。

24) 古代西方人のセレス像を、ユールは次のようにまとめている:「セレス人の国は広大で人口の多い地であり、東は大洋に接して人の棲み得る果てをなし、西はイマムス及びバクトリアの境界近くにまで広がっている。人々は文明化しており、まことにもって温和で質素な気質で、隣人との衝突を避け、親睦な交際すら恥かしがるが、自分たちの産物を売り払うことは嫌がらない。生糸がその主要品であるが、絹織物・毛皮・極く良質な鉄をも含む」(Yule-Cordier [1967], pp. 16-7)。なおユールによれば、セレスに関する古代の記述はほぼすべてプリニウスとプトレマイオスに帰着する。プトレマイオスのセリカについては:中務哲郎訳『プトレマイオス地理学』東海大学出版会、1989、pp. 110-1。プリニウスのセレスは次のごとくである:「[スキタイの東方にいる]最初の間人間居住者はセレス人と呼ばれ、彼らの森から得られる毛織物で有名だ。彼らは葉を水につけた後、その白い綿毛を梳き取る。そしてわが国の婦人たちに、その繊維をほぐし、さらに織り合わせるという二重の仕事を与える。ローマの貴婦人が、人中ですき透った衣服をひらけかすためには、そんなにさまざまな労力が必要であり、世界のそんな遠いところにあるのだ。中国人はその性格は温和だが、彼らもまた他の人類と交わることを避け、商人が彼らのところへ来るのを待っているというような点では野獣と似通っている」「中国人は普通よりも背が高く、

亜麻色の毛髪と青い眼をしており、荒々しい口調で物を言い、旅行者と取り引きする際は言語を用いない。……商品はある河の向い側の岸に、土着人によって売りに出された品物の傍に置かれる。そして、もし彼らはその交換に満足するならば、その商品を持ち去る」(中野定雄他訳『プリニウス博物誌』I、雄山閣、昭和 61 年、pp. 258, 265)。

25) 紙幣とともに漢字についても、ルブルクによって初めてほぼ正しく伝えられた：「カタイの普通のお金は綿から作った紙で、縦横とも手の平くらいの大きさで、その上にマンガ [モンケ] の玉璽のような [文字の] 線が印してあります。彼らは、画家が絵を画く尖った [筆のような] もので字を書き、[それだけで] 一つの意味を表すいくつかの文字を [合わせて] 一つの形にします」(第 29 章、Wyngaert p. 271; Rockhill pp. 201-2; Dowson pp. 171-2; 護 p. 243)。

26) Wyngaert p. 59; Dawson p. 22; 護 pp. 28。インドの区分については前章注 12 参照。カルピニの場合は三分法であり、とすると地理的順序からして「小インド」とはインド以東でなければならないが、エチオピアと混同されている。「大インド」はインド半島部及び大陸部を指すことになる。ちなみにマルコ・ポーロの場合は、チャンパ (南ベトナム) からマドラスにかけて、つまり東海岸を「小インド」、マーバールからインダス河畔にかけての西海岸を「大インド」、エチオピアからソマリア、つまりアフリカ東海岸を「中インド」と称している(第 209-210 章)。

27) このように、大インド (西部もしくは大陸部インド) でチンギス・カンの息子の軍に勝利した、とあるところから、カルピニのヨーハンネースは、1219 年に始まるモンゴル軍の西征によく抵抗し、1221 年春パルフーン (カブールの北) の戦いで大カンの義弟シギ・クトクの軍を破ったホラズム王国最後のスルタン・ジャラル・ウッディーン(1221-31)に比定される (Wyngaert p. cxl 他)。が、ウッディーンはその後 (同年 11 月) インダス河畔の戦いでチンギスに敗れている (村上正二訳『モンゴル秘史』3、平凡社、1988、pp. 197-215; ドーソン前掲書 1、pp. 259-66)。ドーソンはそこで、モンゴル軍が騎兵に「手で毛氈の人体模型を馬上に乗せ、後ろからこれを支えさせて」援軍が来たかのように装い、ホラズム軍を欺こうとしたエピソードを紹介しており (p. 260、出典不詳)、カルピニの記した戦法との類似が注目される。両軍の立場が逆になっている点も興味深い。

これに対してルブルクは、ヨーハンネースをチンギス・カンの敵に見立てる点では同じだが、もはやインドに求めず、ネストリウス教徒と考えられていたカラキタイ・ナイマン部族の王コイル・カン (グル・カン、クチュルク) をヨーハンネースとし、それを、後にテムジンの敵となるケレイト部族のワン・ハン、トオリルの兄弟とする。その富や権力にまつわる伝説については全く相手にせず、大カン・キリスト教徒説も含めてそうした噂を、何事につけ「実際よりも十倍に言いふらす」ネストリウ

ス教徒の誇大宣伝として一笑のもとに付す（第 17 章）。

ポーロの場合は、そのワン・ハン自身が「全世界がその偉大な権力を語るプレストル・ヨハン」に他ならないとし（第 69 章）、チンギス・カンがそれに決戦を挑んで勝利し、アジアの覇者となっていく様が大々的に語られる（第 70-74 章）。しかし一方では、テンドック（天徳軍）のオングト王をネストリウス教徒ゆえにヨーハンネースの後裔ともする（第 79 章）。東方の司祭王ヨーハンネースの幻想は、アジアの覇者チンギス・カンによって現実のものとなると同時に、それにとって代られたわけであり、その具体的なイメージを、冒頭に引いたマルコのクビライ像にみることができよう。いずれにせよ、これらによりかの司祭王はアジアから姿を消し、アフリカ・エチオピアへと移ってゆくのだが、その変遷“さ迷えるヨーハンネース”は興味深いテーマをなす。

- 28) インド周辺に食人を習慣とする人種のいることは、すでにヘロドトスから見られる（前掲書、上、巻三・99、p. 351）。プリニウスは、「食人種」に一節を充て、スキタイやエチオピア等「非常に多くの種族が人体を食用にしている」と紹介する（前掲書 pp. 297-8）。ルブルクもティベットのところで言及し、その行為はもう失われたが、「両親の頭蓋骨で酒杯を作りそれで飲んで故人を偲ぶ」習慣はまだ残っている、と言う（第 26 章）。人間の頭蓋骨で酒を飲むという習慣は、プリニウスではドニエブル河から十日行程のところにいる食人種に当てはめられている（前掲書 p.298）。ポーロでは、ティベット人は「悪党で野蛮」だが、食人の習慣は出てこない。代わりに、中国・福建行省（第 170 章）、ジバング（第 176 章）、スマトラ島（第 182-185 章）、アンダマン島（第 189 章）等に登場する。
- 29) 穴居人についても、プリニウスに見られる（前掲書 pp.299-302）。ここではコーカサス山脈地方とされていることからして、アレクサンデル王の鉄門の高山に閉じ込められた人々の伝説との関連が推測される（前章注 15 参照）。
- 30) こうしたことを報告するにあたって必ず、「信頼できる人から聞いた確かな話」であることが言い添えられる。東洋の驚異一般については、R. Wittkower, art. cit., に詳しい。
- 31) 「私どもの通った地方とその位置、そこで私どもと出会った証人たち、タルタル人の皇帝とその皇子たちの宮廷について」と題される。
- 32) そうした愚痴・憤慨は、ルブルクの旅行記でも絶えず繰り返されるのだが、その怒りはもっぱらモンゴル人の野蛮さと尊大さと、自分たちを身分に相応しい扱いをしないことに向けられ、もし彼らに征服されればどれほどの悲惨と屈辱を忍ばねばならぬ羽目に至るか、ヨーロッパ君候の注意を喚起しようとする。こうした私的な感情や体験の吐露はマルコに見られぬものであり、東西両洋人の人間的・文化的接触と摩擦の最初の生の記録として貴重であるが、旅行記としての価値を低め、成功を

もたらさなかった一因となっていよう。

33) カルピニのバトゥは、「自分の民に対しては優しいが、それでもたいへん恐れられています。闘いにおいて極めて残忍、戦においてまさに明敏、極度に狡猾」である(第9章)。バトゥとの謁見の様子はルブルクにはるかに詳しいが、その人となりについては「ベッロモンテのヨーハンネース侯 [ルイ九世の十字軍遠征に同行した騎士] と同じくらいの背丈に見えました。その時彼の顔は赤い斑点で覆われていました」とあるにすぎない(第19章)。マルコでも人物描写は概して簡単で、当時はまだその習慣や文体が確立されていなかったこともあろう。

34) この玉座は、後に触れる星帝の返書の玉璽とともに、クユク・カアンお気に入りのロシア人黄金細工人コスマスの手になるものという。コスマスはまた、カルピニにとって貴重なインフォーマントであり、彼がモンゴルの社会や文化について得た情報の直接の源は、出発に際して出会ったロシア人や、これら多分捕虜として連れて来られてモンゴルの宮廷にいた、ラテン語やフランス語を解するロシア人や東欧人であった。実際、旅行記の最後のところで自分が本当にモンゴル宮廷に至ったことを示してくれる証人としてその名が逐一挙げられている(この事実はまた、彼の旅行やその報告が信用されなかった、あるいは信用されないことを作者が危惧したことを示す)。

ルブルクの場合も同様で、カラコルムのモンケ・カアンの宮廷で、ハンガリーで捕虜になって連れて来られたというパリ生まれの金工の親方ギョーム・ブーシェと出会い、多くの情報を得ている(その妻はロレーヌ出身の父を持つ娘でハンガリー生まれという)。また実子同然のその養子は、モンケ・カアンの面前での仏教僧たちとの公開宗教論争でルブルク側の通訳として活躍する(第33章)。なおブーシェは、モンケの宮廷にあったという、自動的に酒を注ぐ銀製の機械仕掛けの樹の作者として知られる(第30章)。オルシュキによれば、それら人工の作品は「未開のモンゴル人が持った文明の香のする唯一の芸術品」として宮廷で珍重された: Olschki [1937] pp. 73-105。未見だが同著者には、*Guillaume Boucher: A French Artist at the Court of the Khans*, Baltimore, 1946がある。オルシュキにあってもモンゴル蛮族視はなお強い。

このように、カルピニやルブルクの旅行記はこれらインフォーマントの存在なしには成立し得ず、従来ほとんど取り挙げられてこなかったが、両修道士の東方像やモンゴル観、その社会観察には彼らの影響が無視し得ないと思われる。この点でも両旅行記のモンゴルに関する記述や判断を、個人的な直接の観察の結果もたらされたあるがままの事実を記したものと評価することは留保されるべきであろう。一方また、その報告記に多くの矛盾・混乱や時間的・空間的順序の逆転が見られるのも、彼らから提供された情報を充分整理し切れなかった一面もあると思われる。

- 35) Wyngaert pp. 124-5; Rockhill p. 29; Dawson p. 68; 護 pp. 84-5。ラムージョ版ではこの前に、前述ポーヴェのヴァンサン『歴史の鏡』所収の Simon de Saint Quentin の報告記から取った、新皇帝と皇后を空中に放り上げて宣言する戴冠式の模様が挿入される (pp. 244-5; ドーソン前掲書 2, p. 226、原注一、にも引かれる)。ただし、シモンはモンゴリアにまで至っていない、カルピニに同行したポーランド僧ベネディクトゥスから伝聞したものと考えられている (Rockhill p. 21, n. 1)。ルブルクはモンケ・カアンには少なくとも二度謁見しているが、その人となりについては最初の折にカルピニと同じように、「中背の鼻の低い男で、四十五才くらい」としか言っていない。二度目は、その面前で行われた宗教論争の時で、その時はカアンの相対主義的な宗教観のことを記している。ルブルクはカルピニと若干違って、カアンの宮廷での出来事については、もっぱらそこに群がる宗教家たち、とりわけネストリウス教徒やそれを騙る者たちの無智と愚行を攻撃し、カアンその人に対しては悪感情を記していない(第 28、34 章)。
- 36) 返書は、まずモンゴル語で書かれ、ついで大臣のチンカイらがペルシャ語に訳してその両方を渡し、カルピニらがラテン語で筆記した。モンゴル語原文は失われているが、1920 年 ヴィティカン図書館カステッロ古文書庫からペルシャ語文が発見され、後にペリオによって解説された。その訳文は前掲各書に掲載されている: Wyngaert pp. 141-2; Dawson pp. 85-6; 岩村[1989] pp. 172-7; ドーソン pp. 242-4 (引用同書); 佐口 pp.61-2。* [宮紀子訳「インノケンティウス 4 世宛グユク返書」前掲同書]。なお、ラテン語文はその大意が同行したベネディクトゥスの旅行記に載せられている: Wyngaert pp. 142-3; Dawson pp. 83-4; 護 pp. 124-5。* [拙訳「ベネディクトゥス・ポロヌス修道士の報告」前掲同書]。ルブルクに託されたフランス王ルイ宛てモンケ・カアンの返書(1254 年 7 月)も、大意・調子とも同様なものである。ただし、これはその旅行記に要旨としてメモされているだけで、書簡自体は残っていない(第 36 章)。
- 37) ユールは、両者の旅行記を次のように評する:「これらは、私の知る限りでは、東の果て大洋の沿岸にある偉大な文明国についての知識を再び甦らせ、西洋にもたらした最初のものであった。その王国に彼らは、ヨーロッパでその時初めて耳にされた名前を付けたのだった」(Yule-Cordier [1967] p. 156)。これら旅行記は、ドーソンでもほとんど無批判に援用されている。
- 38) H. Yule, 'Rubruquis', *Encyclopædia Britannica*, vol. XXI, pp. 46-7。
- 39) 13 世紀フランスの Vincent de Beauvais (?-1264) の編んだ百科全書(ca. 1256)。『大鏡』 *Speculum Majus* と総題され、Naturale, Doctrinale, Historiale, Morale の四部から成る。カルピニの旅行記は、前述のごとくそのうち「歴史篇」に収録されている。その他、プリニウス、ソリヌス、ヒエロニムス、イシドルス等の歴史・地理書、アレ

クサンデル王伝説、中世動物譚等を収める。

- 40) 1360年頃イギリス人 Sir John Mandeville (?-1372)によってフランス語で編まれた架空旅行譚。前述ヴァンサン・ド・ボーヴェの百科全書、マルコ・ポーロや14世紀初め中国に渡ったフランチェスコ会士オドリコ・ダ・ポルデノーネ(1265-1331)、アルメニアの君侯ヘトゥム・パトミチェの東方記(『東方史の華』ca. 1307)、ウォラギネの『黄金伝説』、ヨーハンネースの書簡、等を剽窃したもの。百数十の写本が残り、その後も版を重ね、マルコの旅行記と並んで中世最大のベストセラーといわれる。因みに14世紀の同書では、ヨーハンネースの国はインドにあるが、「あまりに遠隔なので、商人たちはカタイの国へゆくほどこの国へは出掛けない」と、カタイよりも遠くに置かれ、しかも「カタイの大汗ほど富裕ではない」とされている(第30章)。
- 41) 一般に13、4世紀の修道士や商人の旅行記が果たした役割と影響については:「これらの旅行記は聖書や古代の記述で定説となっていたアジアの領界をはるかに越える場所を伝えてくれた。通例タルタルと呼ばれた、広大な中央アジア帯をはじめとするいくつかの地域に関しては、中世の記述を超えるものは十八世紀まで現れなかった」(P. J. マーシャル+G.ウィリアムズ(大久保桂子訳)『野蠻の博物誌—18世紀イギリスが見た世界』平凡社、1989、p. 19)。
- 42) 大場正史訳『東方旅行記』東洋文庫 1987、p. 96。
- 43) 同 p. 211。
- 44) 野田良之他訳『法の精神』中、岩波文庫 1989、p. 112。モンテスキューはその原因を風土に求め、「地上で最も独特の民族」であるタルタル人は、「都市も持たず森林も持たない。沼沢もほとんどない。彼らの河川はほとんど常に凍結している。彼らは広大な平原に住んでいる。放牧地と羊群を、従って財産を有している」。しかし、そこには法の支配と自由というものが見られず、「奴隷制と専制政治」が行われる。従って、他国民に対しては極めて残酷で、「占領した都市の住民を刃にかける。彼らはアジアをインドから地中海に至るまで破壊した」と、その暴力性・野蠻性が強調される(pp. 105-134)。こうしたモンゴル像が後にヘーゲルやマルクスに受け継がれ、その世界史のなかに揺るぎなく組み込まれてゆくのは周知のことであろう。
- 45) 他にも次のような表現が見られる:「タルタル人の馬はほとんどすべて白いと聞いていたし、砦のホールに掛かっている古い絵の中でも、タルタル人はみんな白い軍馬に跨がっていた」(pp. 112-3);「ほとんど夢の中でのとおりに、いやもっとはっきりと、北の王国から不思議な人間たち gente misteriosa が下って来ていた。……その異邦人たちは、ゆっくりゆっくりとだが少しずつ近付いていた」(p. 128);「北の王国に対しては積年来深い恨みがあった」(p. 133)。
- 46) D. Buzzati, *op. cit.*, pp. 75-6。

Libellus huiusmodi Joannis de Plano Carpini, qui missus est legatus ad *La Haye* 1735 n. 6°.

Tartari anno Domini 1248 ad Innocentio 4. Pontifice Maximo.

Incipit Oratio in libello Tartarorum.



Omnes sancti fideles ad quos presens scriptum pervenerit, frater Joannis de Plano Car-
pini divini habitum nuncium, Apostolicam sedem legatus nuncius ad Tartaros et nationes alias
orientis, Dei gratiam in presentibus et gloriam in futuris, et de immensa sui triumphalem gloriam.
 Cum ex mandato Dei Apostolicum iremus ad Tartaros, et nationes alias orientis et occidui Do-
 mino Papa et Venerabilium Cardinalium deliberationem, legimus primum ad Tartaros proficere.
 Timebamur enim ne per eos in proximo Ecclesie Dei periculum immineret. Et quamvis in
 Tartaris et alijs nationibus timeremus occidi, vel perpetuo captivum, vel fame, siti, algore,
 et in antumelia et laboribus nimis, et quasi ultra vires affligi (que omnia multo plus
 quam prius credidimus, excepto morte vel captivitate perpetua, nobis multipliciter even-
 runt) non tamen peperimus nobis ipsi, ut voluntatem Dei secundum Dominum Papam man-
 datum implere pattemus, et ut proficeremus in aliquo Christianis ut saltem sciam veraciter
 delincent et intentione ipsorum, possemus illam patefacere Christianis, ne forte subito
 invaderet inuicem eos imparatos, sicut peccati hominum exigentibus alia vice contigit,
 et fecerunt magnam iram in populo Christiano. Unde quaecumque pro vestra utilitate
 vobis scribimus ad cautelam, tamen securius credere debemus quam nos eorum vel ipsi vidi-
 mus oculis nostris qui per annum et quatuor menses, et amplius ambulavimus per ipsos, et
 cum ipsis, ac fuimus inter eos, vel addidimus a Christianis qui sunt inter eos captivi, et ut
 credimus fide dignis. Mandatum etiam a supremo Pontifice habebamus ut eorum per-
 seruteremur, et videremus omnia diligenter. Quid tam nos quam frater Benedictus eius-
dem ordinis qui nostra tribulationis fuit socius et interpreti fecimus studiose.

図3 Plano Carpini, *Historia Mongarorum*

(BnF Dupuy 686, f. 1r, 最初のページ)

*Itinerarium fratris Guillelmi de Rubruquis de ordine fratrum
Minorum, Valli Anno gratie 1283, ad partes Orientales.*

Excellentissimo domino et fratris nostris, Sedrico dei gratia Regi francorum Illustri
fratris Guillelmi de Rubruquis in ordine fratrum Minorum modicum salutem et am per-
bium phare in Christo. Scriptum est in Ecclesiastico de sapiente. In terminis alienarum gen-
tium transiit, bona et mala in omnibus tentavit. Rex opti domine mi Rex, feci: Sed vi-
tam de sapienter et non scilicet. Multi enim faciunt quod facti sapienter, sed non sapienter, sed magis
stulti: de quorum numero sumus me esse. Tamen quocumque modo fecerim, quia dominus meus quam-
de recepi a vobis, ut omnia scriberem vobis, quocumque viderem inter Tartaros, et etiam monuisti
ut non timerem vobis scribere longas literas, facio quod iniunxisti: Cum tamen tamen et Vere-
cundia, quia verba congrua michi non suppetunt qua debeam tante scribere Maiestati.
Doverunt enim vestra sancta maiestas, quod anno Domini millesimo ducentesimo quinquagesimo
tercio, nonas Maij, in regem sumus mare Ponti, quod Bulgariis vocant, Mares Slav, et habet
mille octo miliaria in longum, et dicitur a mercatoribus, et distinguitur quasi in duas partes.
Circum eorum enim esse sunt due provincie terre una ad Aquilonem et alia ad meridiem.
Ista que est ad meridiem dicitur Synopolis: et est castrum et portus illudam dicitur. que
vero ad Aquilonem est, est provincia quaedam, que nunc dicitur a Latinis Cassaria, a Grecis
vero qui inhabitant eam super litus maris, dicitur Caspasia, hoc est Casaria. Et sunt pro-
montoria quaedam extendenda de in mare, et contra meridiem versus Synopolim. Et sunt
trecenta miliaria inter Synopolim et Casariam. In quod sunt septingenta miliaria ad istu-
punctum versus Constantinopolim in longum et latum, et septingenta versus Orientem, hoc est
Armeniam, que est provincia Georgia. Ad provinciam Cassariam sive Casariam applicuimus
que est quasi triangularis, ad occidentem habens civitatem que dicitur Kessove in qua
fuit sanctus Clementis martyr videtur. Et triangulus coram ea videtur Invidiam imperat

*Sup. Hall. 17
Dupuy, pag. 76*

図4 Guillelmus de Rubruc, *Itinerarium*.
(BnF Dupuy 686, f. 38r, 最初のページ)